

収録・解説 酒井董美

語り手 片桐利喜さん

(明治30年年生まれ)

昭和58年7月17日収録

あらすじ

昔、娘が三人いました。

一番上の娘は「法印さん(僧侶のこと)の嫁にな

る」と言っていました。お

父さんやお母さんは「法

印さんがもらってごしな

はらにゃ行かれん」と言

っていたら、法印さんが

娘さんを嫁にもらいに来

られたので、法印さんの

嫁になって行きました。

二番目の娘は「神主さ

んの嫁に行きたい」と言

っていたら、神主さんが

もらいに来られて、嫁に

なっ行って行きました。

一番下の娘さんは「百

姓家に好いちよっけん、

百姓家へ嫁に行く」と言

った。

三人の娘の婿

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

人々は農夫に自分を投影

語っていたら、そのうち百姓家にもらわれて行かれました。

祭りが来て、婿さんたちと呼ばれに来ました。さいなと言ったところ、げをして、トーンをおろ

上二人の婿さんであるその婿さんは「かかさん、法印さんや神主さんは、手拭いとトーンと出いてともに気さくで、歌ったごしなはい」と言ったそり踊ったりされるのに、うです。トーンとは穀物いつまでたっても百姓家をふるい分ける道具のこ

すまねをしながら、大きな声でこう歌ったそつで話で登場するのは、三人娘であり、蛇とか猿の嫁を承知するのは末娘に決まっている。そしてそこから話が本格的に展開する。

一番トーンの下はおん殿さんにさしあげる

二番トーンの下はわれわれなどの飯糧だ

三番トーンの下は神主、法印にやる米だ

アーソーリヤソーリヤソーリヤ

三番トーンの下は上、聖なる数と考えられていた。この「三人娘の婿」の場合も同様である。末娘の婿は普通の農夫である。社会的に対照的な両極にある立場を提示した後、話は進み、祭り

に参って、シブシブ逃げたので、一番下の婿さんの婿さんが一番に勝たれたそつです。

その昔こんぼち、こんぼの葉、あえて嚙んだら苦かった。

歌にこめられた農夫の心意気は、同時に昔話を愛した多くの庶民のそれでもある。人々は、このようにして農夫に自分の姿を投影させて、その勝利に喝采を送っていたのである。

昔話ではよく三人娘とか三人兄弟とかが出てくる。そして末っ子が中心

である。

解説

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)